

2012年度「看護の日・看護週間」行事

第2回「忘れられない看護エピソード」募集

— 「看護」の現場で出会った、心温まる思い出のエピソードを教えてください —

公益社団法人 日本看護協会（所在地：東京都渋谷区／会長：坂本すが）は、5月12日の「看護の日」を含む1週間を「看護週間」として「看護の心をみんなの心に」をメインテーマに、さまざまな事業を実施しています。その一環として、昨年に引き続き、今年も看護職や一般の方々から、看護の現場で出会った「忘れられない看護エピソード」を11月15日（火）より募集します。

部門は看護を行う側を対象とする「看護職部門」、看護を受ける側の患者・ご家族を対象とする「一般部門」があり、どなたでも気軽にご応募できます。各部門の最優秀者には賞状及び賞金20万円を進呈いたします。

第2回は、特別審査員の内館牧子さん（脚本家）が優秀作品を選ぶ「内館牧子賞」（賞状及び賞金10万円）が新設されるほか、昨年心筋梗塞で闘病生活を送られた森本レオさん（俳優）をゲスト審査員にお迎えいたします。また、表彰式は5月12日（土）に都内で行い、受賞者の発表は日本看護協会のホームページ、機関紙、新聞紙面（上位作品のみ）で行います。

前回の第1回は1,940作品の応募があり、素晴らしい作品を通じて多くの方々に看護の大切さを感じていただくことができました。今年も、沢山の心温まるエピソードのご応募をいただけますよう、報道関係の皆さまに募集記事掲載等のご協力をお願い申し上げます。ご希望の方には、第1回の入賞作品を収載した小冊子をお送りいたしますので、下記事務局へご連絡ください。

<看護の日について>

「看護の日」の5月12日は、近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなみのもので、中島みち氏（ノンフィクション作家）の発案・呼びかけにより日野原重明氏（医師）、橋田壽賀子氏（脚本家）、柳田邦男氏（作家）など、市民・有識者による「看護の日の制定を願う会」の運動をきっかけとして、1990年12月に制定されました。以来、5月12日を含む日曜日から土曜日までを「看護週間」とし、毎年、厚生労働省と日本看護協会が中心となり、全国各地で看護に関係したイベントや活動を行っています。



看護の心をみんなの心に

5月12日は
看護の日

<報道関係のお問い合わせ先>

第2回「忘れられない看護エピソード」事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町3-7

電話：03-3263-0005 F A X：03-3263-5623 担当：三樹（みつぎ）、小松

■第2回「忘れられない看護エピソード」募集要項

- 【部門・応募資格】： ① 看護職部門：現在、国内で看護職に就いている方、または過去に看護職に就いていた方
② 一般部門：日本国内在住の方
- 【募集内容】：「看護」を通して得られた忘れられない思い出やエピソードについて800字以内（原稿用紙／ワープロ、縦書き／横書き、いずれも可）でまとめてください。なお、作品には必ずタイトル（題名）を付けてください。
- ※応募は1人1作品、本人作の未発表作品かつ日本語で書かれたものに限りです。判読不明な文字、不鮮明な文字は審査の対象外となる場合があります。必ず楷書で書いてください。なお、応募作品は返却しません。
- 【募集期間】：2011年11月15日（火）～2012年2月29日（水）
※当日消印有効
- 【応募方法】：作品と次の必要事項を記入した用紙（書式自由）を添付して、下記宛に郵送するか、日本看護協会ホームページからご応募ください。①郵便番号・住所 ②氏名 ③年齢 ④性別 ⑤電話番号 ⑥メールアドレス（ある方のみ） ⑦職業 ⑧勤務先と免許取得年（看護職のみ） ※ハガキ、FAXでの応募は不可。
- 【応募先】： **郵送**⇒ 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-7
第2回「忘れられない看護エピソード」事務局
日本看護協会ホームページ⇒ <http://www.nurse.or.jp/episode/>
※11月15日～。専用フォームからご応募できます。
- 【賞金・賞品】： ■ 最優秀賞…賞金20万円（各部門1人）
■ 内館牧子賞…賞金10万円（各部門1人）
■ 優秀賞…3万円（各部門2人）
■ 入選…ナースキティオリジナルぬいぐるみ（各部門7人） ※予定
- 【審査員】：特別審査員 内館牧子さん（脚本家）、ゲスト審査員 森本レオさん（俳優）、日本看護協会関係者などで審査
- 【主催】：厚生労働省、日本看護協会
- 【発表・表彰】：2012年5月12日（土）に開催する表彰式で発表。最優秀賞の受賞者には出席していただきます。また、日本看護協会のホームページ（<http://www.nurse.or.jp/>）および機関紙、新聞紙面（上位作品のみ）などにも掲載予定。
- ※内館牧子賞・優秀賞の受賞者にも、当日出席していただく場合があります。
※受賞者には3月下旬に連絡しますが、その際、写真提供のお願いをする場合があります。なお、選出・選定基準および方法などについての問い合わせには応じかねます。
- 【留意点】：1) 応募作品の著作権は公益社団法人日本看護協会に帰属し、看護サービスおよび看護従事者のイメージアップや社会的評価向上のための広報活動事業等に使用します。なお、応募に関する個人情報は個人情報保護法に則って管理の上、受賞の発表やその連絡、ウェブサイトや広報活動への協力を依頼する目的以外には使用しません。
2) 応募に際しては、作品に登場する人物が個人特定されないようご配慮ください。患者・家族の了承を得るのが難しい場合は、当該患者・家族が不快にならない表現をお願いします。作品中のプライバシー、個人情報に関して主催者は一切の責任を負いかねます。
3) 医療安全、倫理基準など現代と状況が異なる、または不適切な表現があった場合は、主催者の判断で修正させていただくことがあります。
- 【一般問合せ先】：第2回「忘れられない看護エピソード」事務局 電話03-3263-0005
10時～18時（土日祝日・年末年始除く）

■ 公益社団法人 日本看護協会 概要

- 名 称 : 公益社団法人 日本看護協会
- 所 在 地 : 〒150-0001
東京都渋谷区神宮前5-8-2
TEL:03-5778-8831 FAX:03-5778-5601
URL:<http://www.nurse.or.jp/>
- 会 長 : 坂本 すが
- 設 立 : 1946年11月
- 概 要 : 保健師・助産師・看護師・准看護師の資格を持つ個人が自主的に加入して運営する、日本最大の看護職能団体。現在約65万人の会員が加盟し、47都道府県看護協会（法人会員）と連携して活動する全国組織。国民の健康と福祉に寄与するため、看護職能団体として質の高い看護サービスを提供するための活動を展開中。
- おもな活動 :
 - 安全な看護の提供と質の向上
 - 在宅医療・訪問看護の推進
 - 看護・医療政策の提言とその実現
 - 専門看護師・認定看護師・認定看護管理者の教育と認定
 - 看護職の人材確保・就業促進
 - 継続教育の推進
 - 保健医療福祉の連携促進
 - 広報活動
 - 日本看護学会の開催など、研究の振興
 - 国際交流
 - 調査研究
 - ワーク・ライフ・バランスの推進

■参考資料 第1回受賞作品

【 看護職部門 最優秀賞 】

「最後まであきらめない！」愛媛県・篠川 照美さん

20年前の話である。大学生 A 君が、昏睡(こんすい)状態で HCU(ハイケアユニット)に入室し、希望で母親が付き添うようになった。母親は大学まで出向き友人の声を週替わりで録音し、毎日耳元で聞かせた。また自らも廊下に響き渡る声で明るく語りかけていた。母親の愛情の深さ、信念を感じさせる日々であった。私も同じ気持ちで関わったが、母親のそれには到底かなわなかった。しかし、どんな刺激に対しても A 君からの反応はなく、人工呼吸器の音だけが病室に響いた。

数カ月同じ状態が続いた。ふと、なんとなく分かっているのではないか・・・という印象を受けた。医師に報告し、脳波も取ってみたが、結果に変化はなかった。あきらめようとするが、やはり何かある。しかし、周囲は気のせいだと言って取り合ってくれなかった。それでも私は母親と共に信じ、毎日刺激し、その「何か」を明らかにしようとした。

ある日母親が、「この子アイスクリームが大好きだったのよね・・・」とポツリと言った。「刺激を与えてみよう」と考え、医師の許可を得て、アイスクリームを買ってきた。十分に安全性を考慮した上で、微量を舌にのせてみた。すると A 君の顔の半分が口になった。笑ったのである！大きな口を開けてうれしそうに笑った。確かに笑っていた。2人で泣いた。1カ月後には一般病棟に転出するまでに回復した。さらに数カ月が過ぎた頃、母親と一緒に「歩けるようになった」と病棟まであいさつに来てくれた。寝姿と違って2本の足でしっかり立っている彼は大きく見えた。

数年後、病棟入口にスーツ姿の男性が立っていた。「誰だろう・・・。業者かな？」と思いつつ「何でしょうか」と入口に向かった。そこには満面の笑みを浮かべた男性の姿があった。その笑顔はアイスクリームを食べた時の笑顔そのままだった。自然と涙が出てきた。数年遅れで無事に大学を卒業し、社会人となった姿を見せに来てくれたのだった。1人で来た彼の姿が大きく、大きく揺らいで見えた。

【 一般部門 最優秀賞 】

「父との永遠の別れ 一看護への感謝」千葉県・関口 裕司さん

父は仕事一筋で、私が物心ついた時には、すでに単身赴任の連続だった。学校行事にも家族旅行にも父がいた記憶はない。寂しさには慣れたが、ただ、「父にとって仕事とは？」という問いの答えを息子として聞きたかった。しかし生意気盛りの自分は、膝を交えて父と話す機会を、とうとう逸してしまった。

晩年、脳を患った父は、病院に迷惑を掛ける存在だった。怒鳴る。点滴を引き抜く。転んで物を壊す。そのたびに家族は叱られ、病院に居づらくなった。転院先では、前の病院で迷惑を掛けたことを正直に話した。「仕方ないですよ。一番辛いのは、患者さんなんです」。この言葉と看護師の微笑にどれだけ救われる思いがしたことだろう。家族の重荷がすうっと取れ、父の様子も穏やかになった。

ある日、父はベッドで嘔吐した。息子である私は思わず飛び退いてしまったのに、近くにいた看護師は、すぐに父の背に手を当て、「関口さん、大丈夫ですよ。楽な姿勢にしましょう」と看護する。若い彼女の白衣や髪にまで飛沫がはねていた。しかしそんなことは少しも気にする風でもなく、その後の措置を済ませてくれた。使命感といえば簡単だが、それは温かな心に支えられた強さだ。

死の3日前、看護師がベッド脇で父と辛抱強く言葉を交わしているのに驚いた。父は部下と話しているようで、彼女もすっかりその部下になりきっていた。突然、父が叫ぶ。「北見の牧場で牛の出産がある。会社の獣医を連れて、雪をかき分けて応援に行くぞ」。彼女が返事をする、父は安心したように目を閉じた。私は初めて父の貴い仕事ぶりを知った。あの時知りたかった、父にとって仕事とは という問いの答えとして、これ以上は必要なかった。

看護という仕事は、看護マニュアルが可能にするのではなく、深い愛に基づいた貴い行いの一つ一つによって結晶する。

父との永遠の別れは、言葉に尽くせぬ感謝にあふれるものとなった。